

《付 記》

奥村茂次先生を追悼する

渡 辺 邦 博

奥村先生が他界されてから、早くも1年以上経過してしまいました。ここに後進ならびにかつての同僚として、この機会を借り、一言申し上げます。

私のはじめて先生のお姿を拝見したのは、大学紛争の最中、JR 杉本町の踏切を渡り、4階建ての経済研究所に向かわれる紺の背広のお姿であったかと思います。ようやく紛争後の校舎が封鎖解除によって再開された講義の合間、学生たちと大学当局との大衆団交が繰り返され、実直な面持ちで壇上に着席しておられました。

その先生と、私が勤務を開始した大学で、JR 王寺駅近辺で数名の「若手スタッフ」と席を同じくしました。当時大学は経済学部だけの単学部から、法学部などの学部を増設、次々と学生定員を増加した頃で、大学としての発展を遂げた反面、初代理事長が学長を兼務し続け、不満が累積する時期でしたが、先生は真摯に私たちを相手とされ、粘り強く展望を模索するのに導かれました。

奈良産大は、その後数々の難局にさらされ、浮沈を繰り返し、名称変更後今に至っています。先生はご退職後も、入学・卒業の式典には、義理堅くご出席を賜り、見守って頂いたと解釈しております。

先生が経済学部長として、学部の運営に携わっておられた頃のことを、一つ記します。

本学に6000名という学生が在籍していた頃、当時案件をめぐり会議

が再三、年度末に開催されたことがありました。学長と教授会との間に立たれ、苦肉の策を講じられたと推測します。結果は変わりませんでした。その為か、先生は一時体調も崩されたかと思いますが、周辺には何も漏らされず、各方面に対して誠実に対処されました。それによって、ワンマンで慣らした初代学長・理事長にも一目置かせたと考えます。上に立つものとして、最終決断はひとり、ただしその結果には身体を張る、これを身をもって示されました。

しかし、不思議と先生からのご配慮には、励まされたことも沢山あります。

1993年5月は奥様の苑子様の個展が神戸トアロードで開催されたのに次女と訪問した年ですが、私は、はじめてのスコットランド渡航を試み、ご夫妻とロンドンでもお会いする機会がありました。SOASにおられた杉原薫さんと昼食を共にしたり、帰国前に「ディケンズ・イン」の夕食に招待して頂き、奥様が「シゲちゃんの何処がいいの？」と聞かれたことが強く記憶に残っています。私にすれば、奥様に対してお聞きしたい様な質問で、面食らいました。

さらに、コモ湖畔ストレーザの別荘に2006年と2015年に2度もお邪魔して、聞き取りをさせて戴き、世界遺産クレスピ・ダッダ訪問後、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会のドメニコ修道院食堂の壁面に描かれたダ・ヴィンチ「最後の晚餐」への予約に奥様のお手を煩わせた折、「あれはチェナーコロ Cenacolo と言うのよ」、とお教えを受けたり、ボローニャ近郊の休暇中に滞在された故ドナルド・ドーアさんにお引き合わせ頂いた後、イタリアらしいバル Bar で夕食をご馳走になったりもしました。その折の奥様の機関銃のようなイタリア語も忘れることができません。

先生が1990年に書かれた、「分散校舎あれこれ」には、経済研究所の度重なる移転を中心に、戦後の学舎移転が語られています。最近市大経

研編纂になる経済学辞典の変遷を調べましたが、昭和5年から11年にかけて完成した7巻ものの『経済学辞典』を模様替えして、言わばその戦後版を模索した結果、『経済学小辞典』(1951)、その『増補版』(1956)、そして「小」を省いた『経済学辞典』(1965)の出立を追いますと、ほとんどが上記校舎移転を繰り返した時期に重なります。編纂にあたられた当時の所長・富永祐治先生は、新版の特徴の一つを「二つの経済学の対等な比重」で収録したと述べていますが、奥村先生がちょうど学問のお立場を固められた時期に重なります。私は先生への聞き取りを通じて、名和統一の「三環節」論のような学説を右に見ながら、国際経済・アメリカ経済という事実に密着して実証的方法を先生が継続された裏に、方法態度のようなものをお聞きしたいと思い、何度か機会を頂戴しました。その折、学長・研究所長としての恒藤恭、学部長としての福井孝治のスタンスなど、戦後の10年を過ぎた1950年代に大学全体がある種の路線転換を遂げたと思われる頃、小野義彦先生を招聘して新たな段階を迎えた事情など、お聞かせ頂きたいと申し上げたのですが、いくつかは灰めかされてなるほどと思ったものの、基本は「まだ存命中の人もある」との婉曲な否しでありました。

この聞き取りの時、例えば明治世代の大河内一男、名和統一（二人は、旧制第三高校の同期）などの自叙伝を読むと、京都の河上肇か、東京の河合栄治郎かと、そうした学者の講義を聞きたいと思ったなどと言われているので、奥村先生にもそうした質問をすると、お答えは、ただ「大学に行きたかった」とのことでした。先生のお兄さまが高商で、それは戦前では高等教育機関ですが、高等学校や大学予科のような、いわゆる高等教育普通機関を経過した後に進む大学とは？私はその意味を十分には理解しておりませんが、奥村先生のお答えの、「大学」の何たるか。それは先生にとっては、格別な存在だったのだ？と思われました。また、奥村先生らしいとも言えますが、「予め先入観を持つことなく」に通ず

る面があるのではと思います。誰のどの学説を研究したいとはお考えでなかったのでしょうか。

ただ、先生とお話ししていつも感じたことは、全人格的な陶冶を身につけられていて、交わされるお言葉、何気なく示された先生にとっては専門外に属する爽やかな素養でした。これは、いわゆる大正世代に共通することで、書画であったり、楽器や音楽であったり、ある年に天寿を全うした母のことで年賀を辞退する挨拶を送ったところ、丁寧なお言葉のお葉書を頂戴しました。ギリギリで生きる術にも事欠く自分とは、別の世界だなあとはい知らされたことでした。